

24. トヨタの実験都市

私の出身の埼玉県毛呂山町には「新しき村」がある。子供の頃には村のお祭りに何回か行った思い出があり、武者小路実篤が大勢の前で座って何か講話していたことも覚えている。定年後に村の「新しき村美術館」に見学に行ったこともある。

「新しき村」は武者小路実篤が提唱した「人間らしく生きる」「自己を生かす」社会の実現を目指して大正 7 年に宮崎県児湯郡木城村に誕生した。理想郷作りを目指したが、後年その地に発電所のダムが作られることになり、昭和 14 年に現在の毛呂山町に移って再出発することになる。宮崎にも少し残っているようだが、宮崎の新しき村に対して、毛呂山の新しき村は「東の村」とも呼ばれている。

この新しき村の精神を、武者小路実篤は 1959 年 1 月 1 日に書いている。要約は村のホームページに次のようにある。

- ・全世界の人間が天命を全うし、各個人の中にある自我を生長させることを理想とする。
- ・自己を生かすため、他人の自我を害してはならない。
- ・全世界の人々が我らと同じ精神、同一の生活方法をとることによってその義務を果たし、自由を楽しみ、正しく生き、天命を全うすることができる道を歩くように心がける。
- ・かくのごとき生活を目指すもの、かくのごとき生活の可能性を信じ、また望むもの、それは我らの兄弟姉妹である。

さらに要約すれば、「自分を生かし、他人を尊重することで全ての人が人間らしい生活ができるように協働する」というもので、「自他共生」ともいわれる。

さて、「トヨタ自動車の新都市構想」が発表され話題になった。モノやサービスがつながる「スマートシティー」構想で、自動運転車などを駆使し新しい街のあり方を模索するものだという。東京新聞の社説（2020/1/16）によれば次のようにある（要約）。

「トヨタ自動車の社長が世界最大の家電 IT 見本市「CES」で表明。静岡県裾野市の子会社工場跡地（約 70 万平方メートル）に道路を敷き、自動運転の電気自動車（EV）「e-Palette（イーパレット）」が人を運ぶほか、移動店舗としても活用される。住宅などの建物は木材で造り、屋根には太陽光発電パネルを設置。家庭用ロボットの支援で快適な暮らしを提供し、人工知能（AI）による健康チェックも。来年初めにも着工。当初はトヨタ従業員や科学者ら約二千人が入居し、徐々に住民を増やす計画。

社長は今回の構想について「ゼロから街をつくる非常にユニークな取り組み。さまざまなものがつながり合い、持続可能な未来のインフラを作り上げる」と意義を強調した。

各地で計画が持ち上がり、政府も後押しするスマートシティーは「諸課題に対し、新技術を活用して整備、管理される持続可能な都市」というのが大まかな定義だ。以前は省エネに目的を特化したケースが多かったが、最近はあらゆるモノがネットワークでつながる「IoT」の普及で、健康増進、防災など多様な分野をカバーする計画が増加。トヨタの新都市はこの流れに沿った動きだ」

IT や AI の急速な発展は社会の構造にも大きな影響を与え、世の中の牽引的存在である自動車会社の超大手といえども、単に自動車だけを作っていたのでは先が危ぶまれるという状況

なのだろう。優秀な大手ゆえにそれが見えているのかも知れない。それだけにトヨタの掲げる新都市構想は今までにない壮大なものであり、社会が抱える（技術的）課題の解決につながるものとして期待できる。

一方、高度な技術によって創られるこのような便利な環境は、人間にとって本当に良いことなのだろうか、人間を本当に幸福にするのだろうか、との思いも湧いてくる。どうしても、「無機質」な社会になるのではないかと思ってしまい、あまり、「住みたい」との思いは湧いて来ない。

実験都市では個人データも含めて、ありとあらゆる膨大なデータが集められ、監視もされる可能性があるのではないか。立派な計画にも表と裏があり、裏面が人間本来の性格と対峙したときは計画の遂行も難しくなりはしないか。表向きの便利だけを追求した街作りにならないようにして欲しいと思う人は相当数いるに違いない。

武者小路実篤の人道主義を背景とした新しき村の精神である「自他共生」は、実験都市の社会でも基本に据えることのできるものではないか。その上での技術の高度化であって欲しいと思う。

(2020 年 1 月 24 日)